

甲虫ニュース

No. 151

September 2005

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, IV

佐藤正孝・吉富博之

Taxonomic notes on the aquatic Coleoptera of Japan, IV

Masataka SATO and Hiroyuki YOSHITOMI

保育社の原色日本甲虫図鑑(1985)の執筆に当たって、当時における学名などの整理のため、佐藤は上記表題で所属の変更などを行った。その後、水棲甲虫類の分類も世界的にかなり進展したが、日本ではこうした基礎的なことに目を向ける習慣があまりないらしく、あるいは外国の文献に目を通す機会が少ないためか、従来の図鑑からの引用が相変わらず多い。さらに最近、東海大学出版会から出版された「日本産水生昆虫」の甲虫類に関しては一応最新の学名を校正時に対応させておいたが、他の方々の原稿の遅れで出版も遅れに遅れ、我々の原稿そのものは10年以上も前に執筆した内容である。そこで、水棲甲虫類の研究を進めるに当たり、やはり最新の学名などに正しておいた方が良いと思うことが多々あるので、吉富と共に折に触れて解説していこうと再びここに筆を執る次第である。

この報告をまとめるに当たり、標本、文献など資料を提供してくださった A. N. NILSSON 博士(Umeå Univ.), 野中勝(東京大学), 正田直之(水戸), 西原省吾(横浜), 石田勝義(東郷)などの諸氏にお礼を申し上げる。

ナガチビゲンゴロウ (*Uvarus tokarensis*) の種名

ナガチビゲンゴロウは、トカラ中ノ島で得られた僅かな個体で SATO (1972) が記載し、その学名として *Uvarus tokarensis* SATO が用いられてきた。しかしこの種については、すでに BALKE 博士と共著(1995)でオーストラリア産の *Limbodessus compactus* (CLARK) と同じであるとして処置しておいた。

この種のように広域に分布する種について、特に灯火で得られる機会の多い種では、最近、船舶をはじめとする交通機関の発達によって移動が容易になったため、昆虫類の移動もかなり頻繁となっていると考えられる。特に琉球列島のような島嶼部で得られる種に対しては、慎重な検討が必要である。学名を整理すると以下のようなようになる。

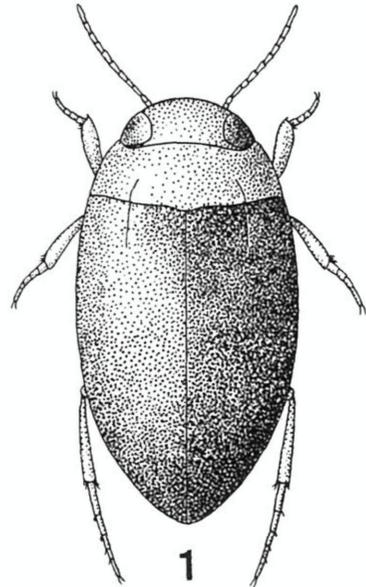
Limbodessus compactus (CLARK) ナガチビゲンゴロウ (Fig. 1)*Hydroporus compactus* CLARK, 1862, 421. (Adelaide)*Hydroporus compactus*: SHARP, 1882, 362. (Eastern Australia)*Limbodessus compactus*: GUGNOT, 1939, 53.*Bidessus neoguineensis* RÉGIMBART, 1892, 990. (Rigo, Papuaasia Orientale)*Uvarus tokarensis* SATO, 1972, 53. (Nakano-shima Is., Tokara)*Bidessus noteroides* RÉGIMBART, 1883, 223. (Java oriental)

Fig. 1. *Limbodessus compactus* (CLARK)
ナガチビゲンゴロウ。

分布: 琉球列島 (トカラ中ノ島, 奄美大島, 伊平屋島, 南大東島, 石垣島); オーストラリア, ニューギニア, ジャワ.

日本産ヒラタヒメゲンゴロウ属 (*Colymbetes*) の種名

ヒラタヒメゲンゴロウ属の仲間、北方に多くの種が知られており、日本からは、大桃 (1992) が北海道からヒラタヒメゲンゴロウ *Colymbetes dolabratus* (PAYKULL) として最初に記録したが、引き続き本州からも山崎・八木 (1992) によって記録された。いっぽう、森・北山 (1993) は上記の種をエゾヒラタヒメゲンゴロウ *Colymbetes* sp. として図示したが、その改訂版 (2002) で、NILSSON (1995) が *Colymbetes tolli* ZAITZEV と扱っているのを踏襲して日本産の学名に当てた。しかし、NILSSON & KHOLIN (1994) がすでに樺太から記録するに当たっては、“If not identical with *C. tolli* this is an undescribed species, as suggested by Dr. M. SATO (pers. comm.)” と付記しているが、これは 1993 年にアメリカで NILSSON 博士に会った折、佐藤が新種であると話したことを受けたものである。それを早く記載しなければと思いつつ、当時忙しくして、さらに定年が近づくとつれて記載することを失念し、彼との連絡も以前ほどではなくなってしまった。一方、彼はゲンゴロウ類の世界のカタログ (2001) を公表する必要に迫られ、痺れを切らしたのか、NILSSON (2002) は極東ロシアと樺太の標本に基づいて *C. pseudostriatum* の種名で記載した。彼は直接に日本産の標本は見えていないが、分布には北海道と青森、さらに中国が入っている。

なお、記載用に用意した図が手元にあるので、ここに示しておきたい。この図は石田勝義氏の健筆になるもので、お礼を申し上げる。従来の記録などと合わせて学名を整理すると次のようになる。

Colymbetes pseudostriatum NILSSON エゾヒラタヒメゲンゴロウ (Figs. 2, 3)

Colymbetes pseudostriatum NILSSON, 2002, 191. (Lake Malyy Pribrezhnoye, S. Sakhalin)

Colymbetes striatus: J. BALFOUR-BROWNE, 1947, 451. (Hsiaoling, Manchuria)

Colymbetes dolabratus: OHMOMO, 1992, 2. (Toyotomi-cho, Hokkaido)

Colymbetes tolli: NILSSON & KHOLIN, 1994, 151 (Sakhalin); Mori & Kitayama, 2002, 136.

(Hokkaido; Honshu, Aomori)

Colymbetes sp.: MORI & KITAYAMA, 1993, 125. (Hokkaido; Aomori, Honshu)

分布: 日本 (北海道, 本州北部); 極東ロシア, 樺太, 中国 (辽宁省).

ヒラタドロマシ (*Mataeopsephus japonicus*) の亜種の取り扱い

ヒラタドロマシ科については、本誌でチェックリストを吉富・佐藤 (2003) が作成したが、その中でヒラタドロマシの亜種関係については従来のままとし、あえて学名には触れず、同一種と考えられるが検討中である、とだけにしておいた。それは、LEE *et al.* (2003) による *Mataeopsephus* 属の再検討の結果が丁度校正中であり、チェックリストの中にも含ませることによりその後の取り扱い上で学名の混乱を避ける意図があったからである。この種は、大陸と日本の個体では背面の点刻や♂交尾器に多少の地理的変異が見られるが、その差は軽微であることから同一種として扱った。学名を整理すると以下のようになる。

Mataeopsephus japonicus (MATSUMURA, 1916) ヒラタドロマシ

Betelmis japonicus MATSUMURA, 1916, 5. (Gifu, Kyoto, Honshu)

Mataeopsephenus japonicus: ZAITZEV, 1908, 4.

Mataeopsephenus granulicollis HINTON, 1935, 169. (Japan)

Mataeopsephenus coreranicus DELÈVE, 1967, 414. (Soktan, Corée)

Mataeopsephus japonicus sasajii SATO, 1970, 28. (Azamo, Tsushima)

Mataeopsephus koreanicus sasajii: NAKANE, 1991, 10.

分布: 日本 (北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬); 極東ロシア, 中国 (辽宁省, 湖北省), 韓国.

日本産ホソガムシ属 (*Hydrochus*) の種

日本のホソガムシ属に関しては、BALFOUR-BROWNE & SATO (1962) が 1 新種の記載を含めて日本産種についてまとめ、それを佐藤 (1978) が解説したことがあり、1 属 3 種がこれまでに知られている。それ以降ほとんど知見が加えられないままに今日に至っているが、チュブホソガムシだけが環境庁 RDB (1991) の希少種 (環境省 RDL では NT: 準絶滅危惧種) に指定されているせいもあってか、多少の記録が見られる。この科に含まれる種は、♂交尾器に種の特徴が出やすいグループであり、それを調べることにより、容易に種の同定が可能である。以下に新記録種を含め日本産 4 種について記述し、検索を示す。

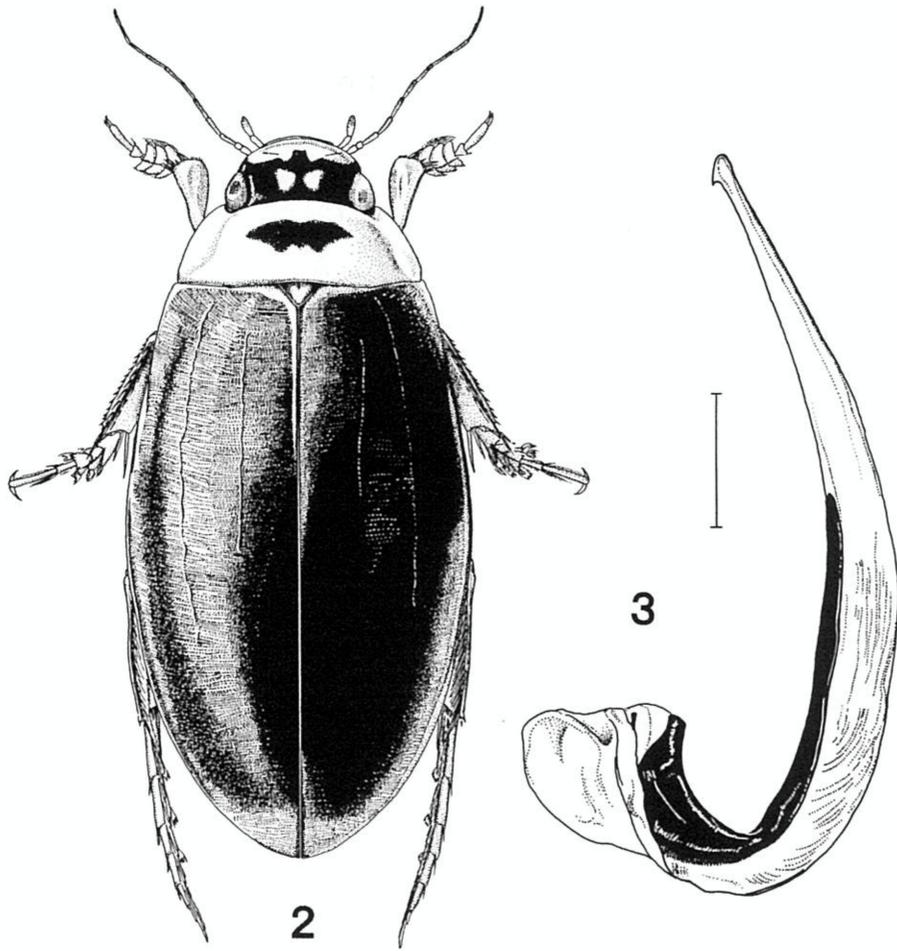


Fig. 2, 3. *Colymbetes pseudostriatus* NILSSON エゾヒラタヒメゲンゴロウ — 2, 全形図; 3, ♂交尾器.

***Hydrochus japonicus* SHARP ヤマトホソガムシ (Figs. 4, 8)**

Hydrochus japonicus SHARP, 1873, Trans. Ent. Soc. Lond., 1873: 64. (Nagasaki, Kyushu)

熱帯の止水域に広く分布する普通種である。日本では水生植物の多い富栄養的な池に生息するが、本州での記録は最近少なくなった。

検視標本: 1♂, 沖縄県西表島高那, 1-III-1995, 野中勝採集 (♂交尾器, slide no. HY 1026). 多数個体 (琉球, 台湾, 東南アジア).

分布: 日本 (本州, 四国, 九州, 琉球); 台湾, 中国, フィリッピン, 東南アジア, アッサム.

***Hydrochus aequalis* SHARP ホソガムシ (Figs. 5, 9, 10)**

Hydrochus aequalis SHARP, 1884, Trans. ent. Soc. Lond., 1884: 457. (Ogura Lake, Kyoto)

現在までに、原記載時の京都・大阪における 1♂, 1♀の記録以後 100 年以上も記録されることがなかった。今回、正田直之氏のご好意で検することができた青森県産の標本は、この種と同定できるもので、♂交尾器を図示し、現在の原産地での再記録は絶望的であったが、やはり絶滅しないで日本に生息していたことを喜び、ここに記録したい。この種は特徴的な♂交尾器をしており、キタホソガムシ (新称) にやや似るが median lobe の形は側面から見ると全く異なる。図示したものは median lobe の形を明確に見せるためにやや平圧したものである。

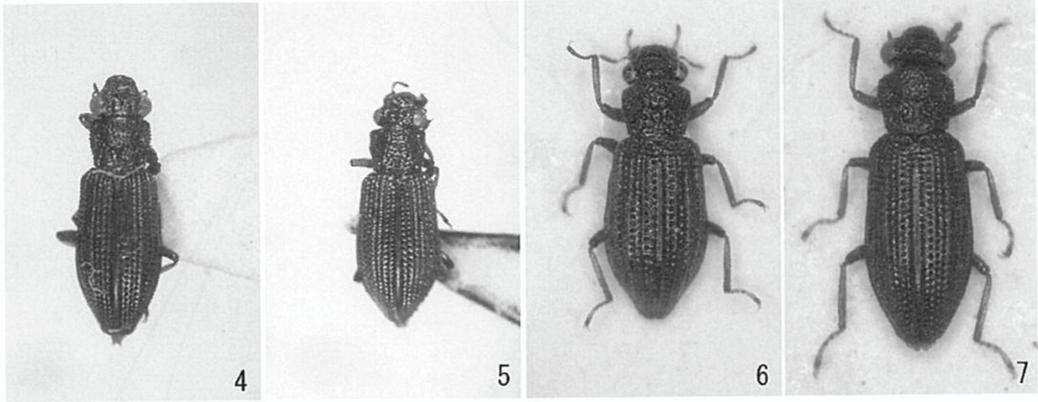


Fig. 4. *Hydrochus japonicus* SHARP, 1873 ヤマトホソガムシ.
 Fig. 5. *Hydrochus aequalis* SHARP, 1884 ホソガムシ.
 Fig. 6. *Hydrochus chubu* BALFOUR-BROWNE & SATO, 1962 チュウブホソガムシ.
 Fig. 7. *Hydrochus laferi* SCHATROVSKIY, 1995 キタホソガムシ.

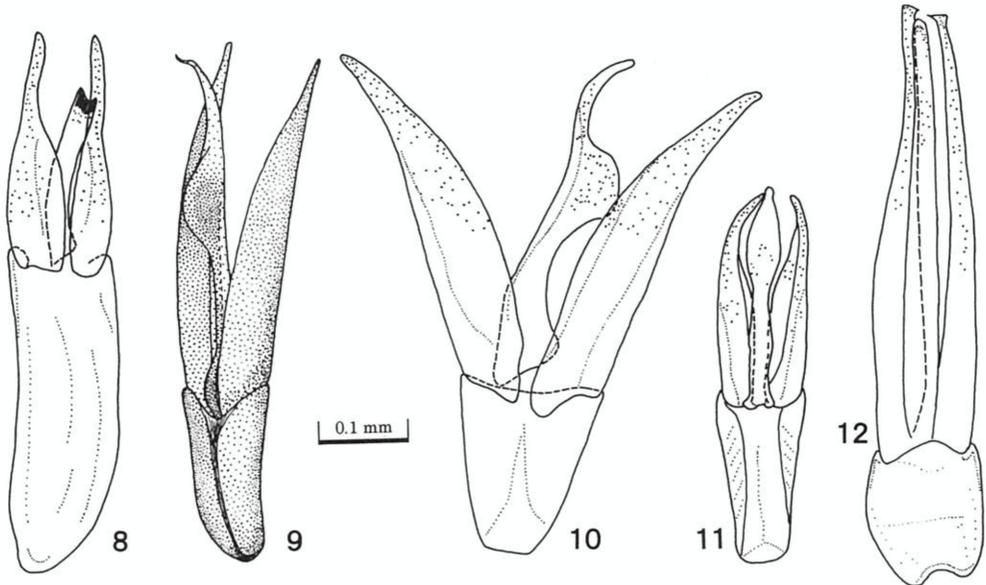


Fig. 8. *Hydrochus japonicus* SHARP, 1873 ヤマトホソガムシの♂交尾器.
 Fig. 9, 10. *Hydrochus aequalis* SHARP, 1884 ホソガムシの♂交尾器 — 9, Paratype; 10, 青森産.
 Fig. 11. *Hydrochus chubu* BALFOUR-BROWNE & SATO, 1962 チュウブホソガムシの♂交尾器.
 Fig. 12. *Hydrochus laferi* SCHATROVSKIY, 1995 キタホソガムシの♂交尾器.

検視標本: 4頭, 青森県西津軽郡木造町平滝沼, 1-VIII-1997, 疋田直之の採集 (♂交尾器, slide no. HY 1025).

分布: 日本 (本州).

***Hydrochus chubu* BALFOUR-BROWNE & SATO チュウブホソガムシ (Figs. 6, 11)**

Hydrochus chubu BALFOUR-BROWNE & SATO, 1962, Nipponius, 1(19): 3, figs. 2, 5. (Obirayama, Yokkaichi)
 最近まで採集記録が少ない種であったが, 環境省のRDB(1991)に指定されることによって, 松井(1992)などによる記録が, 本州北部から四国, 九州にいたる各地からそれぞれ少ない個体ではあるが報告されるようになってきた.

検視標本: 15 頭, 石川県加賀市片野鴨池, 29-IV-1997, 6-XI-1998, 西原省吾採集; 10 頭, 同上, 13-VII-1998, T. TOMISAWA 採集 (♂交尾器, slide no. HY 1024); 7 頭, 同上, 14-IX-1998, 疋田直之採集。
分布: 日本 (本州, 四国, 九州)。

Hydrochus laferi SCHATROVSKIY キタホソガムシ (新称) (Fig. 7, 12)

Hydrochus laferi SCHATROVSKIY, 1989, in Key Ins. Russ. Far E., Vol. III, Col. Pt. 3: 275, fig. 21.

Hydrochus laferi SCHATROVSKIY, 1992, Entom. Obozr., 71: 361, fig. 5, 6. (Krylovka, Maritime)

Hydrochus aequalis: SATO, 1985, Coleopt. Jpn. Col., II: 204, pl. 37, fig. 24. (Hokkaido)

佐藤 (1985) は図鑑の作成に当たり、北海道から採集されたホソガムシ科の標本が手元にあり、外部形態からホソガムシであろうと判断して、分布としては、本州・北海道として図示した。その後、♂交尾器の median lobe の形がホソガムシとはやや異なっていたため、正式な記録としての発表は保留していた。今回、改めて♂交尾器を調べると、明らかにホソガムシとは異なる種であることが判明し、よく検討してみるとロシアから記載された本種に同定できることが判った。よって北海道からのホソガムシの記録は削除となり、本種に新和名を与えて、ここに日本から初記録とするものである。交尾器はホソガムシのものと同様だが、側面から見ると median lobe も lateral lobe の形も全く違う。図示した交尾器はホソガムシと同様にしたもの。今のところ、日本からは今回記録した標本のみが採集されているだけである。筆者らは、北海道で数知れずの採集を経験しているが、それ以後、まだ何処からも採集できないでいる。

検視標本: 8 頭, 北海道サロベツ, 24-VIII-1977, 佐藤正孝採集 (♂♀交尾器, slide nos. HY 1022, 1023)。
分布: 日本 (北海道); 極東ロシア。

ホソガムシ属の種への検索

- 1 (4) 上翅の奇数間室は隆条となるが、明瞭でない。下唇基節は中央がくぼみ、点刻を散布する。
- 2 (3) 前胸背の凹陷は顕著である。上翅の奇数間室はやや隆条となる。背面の色彩は暗褐色で、緑ないし藍色気味の弱い金属光沢がある。 *H. japonicus* SHARP
- 3 (2) 前胸背の凹陷はあまり顕著でない。上翅の奇数間室はほとんど隆条とならない。背面の色彩は黒色で強い赤緑色の金属光沢がある。 *H. aequalis* SHARP
- 4 (1) 上翅の奇数間室は明瞭に隆起し、隆条となる。下唇基節は中央後半が強く窪む。
- 5 (6) 背面の色彩は暗褐色で、金属光沢がある。頭部は暗色。前胸背は幅と長さはほぼ同じ。 *H. chubu* BALFOUR-BROWNE & SATO
- 6 (5) 背面の色彩は赤褐色で、金属光沢は弱い。頭部は黒色。前胸背は長さよりやや幅が広い。 *H. laferi* SCHATROVSKIY

Summary

Some aquatic Coleoptera of specific names related with synonyms are arranged.

Limbodessus compactus (CLARK) Dytiscidae.

Colymbetes pseudostratus NILSSON Dytiscidae.

Mataeopsephus japonicus (MATSUMURA) Psephenidae.

Four Japanese species of the genus *Hydrochus* (Hydrochidae) are enumerated and their keys to the species are given. Among them, *H. laferi* SCHATROVSKIY is the new to the fauna of Japan and *H. aequalis* SHARP is the second record from Japan after over 100 years.

主要参考文献

- BALFOUR-BROWNE, J. & M. SATO, 1962. On the Japanese species of the genus *Hydrochus* LEACH (Coleoptera, Hydrochidae). *Nipponius, Acta Coleopterologica*, 1(19): 1-6.
- BALKE, M. & M. SATO, 1995. *Limbodessus compactus* (CLARK): a widespread Austro-Oriental species, as revealed by its synonymy with two other species of Bidessini (Coleoptera: Dytiscidae). *Aquatic Insects*, 17: 187-192.
- CLARK, R. H., 1962. Catalogue of the Dytiscidae and Gyrinidae of Australia, with descriptions of new species. *The Journal of Entomology*, 1(6): 399-421.
- LEE, C.-F., M. A. JÄCH & M. SATO, 2003. Psephenidae: Revision of *Mataeopsephus* WATERHOUSE (Coleoptera), pp. 481-517. In JÄCH & Ji (eds.), *Water Beetles of China*, 3. 572 pp.
- 松井英司, 1992. 九州新記録のチュウブホソガムシ. 月刊むし, (262): 14.
- 森 正人, 北山 昭, 2002. 改訂版, 図説日本のゲンゴロウ. 231 pp. 文一総合出版.
- NILSSON, A. N., 2002. Taxonomic and faunistic notes on East Palaearctic *Colymbetes* species, with the description of a new species from the Far East (Coleoptera: Dytiscidae). *Entomologica Fennica*, 13: 189-193.

NILSSON, A. N. & S. KHOLIN, 1994. The diving beetles (Coleoptera, Dytiscidae) of Sakhalin—an annotated checklist. *Entomologisk Tidskrift*, (115): 143–156.

大桃定洋, 1992. 北海道宗谷地方で日本未記録のヒメヒラタゲンゴロウを採集. 月刊むし, (262): 2–3.

佐藤正孝, 1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース, (40): 1–3.

佐藤正孝, 吉富博之, 2005. コウチュウ目, pp. 591–658. 川合, 谷田 (共編), 日本産水生昆虫, 1342 pp. 東海大学出版会.

SCHATROVSKIY, A. G., 1989. 12. Fam. Hydrophilidae, pp. 264–293. *In* Key to the Insects of Russian Far East, Vol. III, Coleoptera, Pt. 3. 572 pp. Vladivostok, Dal'nauka. (In Russian.)

SCHATROVSKIY, A. G., 1992. New and little-known Hydrophiloidea (Coleoptera) from Southeastern Maritime Territory and adjacent regions. *Entomologicheskoye Obozreniye*, 71(2): 359–371. (In Russian.)

山崎一夫, 八木剛, 1992. 青森 (津軽/下北) のゲンゴロウ, ガムシ類. うんころがし, (61): 3–7.

吉富博之, 佐藤正孝, 2003. 日本産ヒラタドロムシ科のチェックリストと覚え書き. 甲虫ニュース, (142): 7–10.

(佐藤: 名古屋市緑区, 吉富: 環境指標生物)

コルリクビボソハムシ (ハムシ科, クビボソハムシ亜科) 通常型と 黄脚型の間中型の発見

鈴木 邦 雄

Discovery of an intermediate form between two forms, nominotypical
one and f. *hiranoi*, from Toyama Prefecture, Honshu, Japan

Kunio SUZUKI

コルリクビボソハムシ *Lema (Lema) michioi* K. SUZUKI, 2005 (ハムシ科, クビナガハムシ亜科) には, 全脚の腿節がほぼ黒褐色で脛・付節の基半部が暗黄褐色を呈する通常型と, 全脚が転節および脛節基端部を除き全体は淡黄色～淡赤黄色の黄脚型 f. *hiranoi* K. SUZUKI, 2005 が存在する。黄脚型は, これまでに富山・愛知・兵庫の 3 県から計 41 個体が得られており, その出現頻度は地域や個体群によって異なっている (SUZUKI, 2005)。筆者は, 2005 年, 富山県下各地で本種を多数採集してきたが, 黄脚型の出現頻度はきわめて低く, 個体群によってはまったく見られない。体色変異はハムシ科では多くの種で広く認められ, 脚の色彩に関しても, たとえばルリハムシ *Linaeidea aenea* (LINNAEUS, 1758) (ハムシ亜科) のように, 紀伊半島や伊豆半島などでは通常黒青色ではなく赤褐色の個体群が出現し, 亜種 *L. aenea tsutsuii* NAKANE, 1955 として区別されているケースが知られているが, 同一個体群内にこのような明瞭な 2 型の出現するケースはほとんど知られていないのではないかと思われる。

本種は, 富山・愛知・兵庫・岡山・島根の 5 県と本誌本号で筆者が新たに記録した福井・石川・千葉 3 県を含めた計 8 県下に生息していることが判明しているが, おそらく関東地方以西にはかなり普遍的に分布しているものと推測される。本種の生息分布域の把握と, 黄脚型の地理的分布とその出現頻度が地域によってどのように変化するか, 今後, 特に西南日本各地での調査が望まれる。

筆者は, 2005 年 7 月, 全脚の腿節が暗褐色, 脛・付節が全体淡黄褐色を呈する通常型と黄脚型の間中型を計 2 個体採集したので報告する。

調査個体: 通常型♂13 exs., 同♀20 exs., 黄脚型♀2 exs., 中間型♀1 ex., 富山県砺波市市谷(いちのたに), 17-VII-2005; 通常型♂19 exs., 同♀11 exs., 黄脚型♂2 exs., 同♀1 ex., 中間型♂1 ex., 同所, 23-VII-2005. 採集者は, いずれも筆者。

富山県下では, これまでに各地から採集された 600 個体以上の標本を調べたが, このような中間的な個体は今回初めて得られた。

引用文献

SUZUKI, K., 2005. Description of a new species of the genus *Lema* (Coleoptera, Chrysomelidae, Criocerinae) from Honshu, Japan. *Elytra, Tokyo*, 33: 86–94.

(930-8555 富山市五福 富山大学理学部生物学教室)

琉球・八重山諸島産コメツキムシ類の分布記録 (2)

大平 仁 夫

Notes on some elaterid-beetles from the Yaeyama Group in the
Ryukyu Islands, Japan (2)

Hitoo ÔHIRA

Abstract. *Procraerus kadesanus* was originally described by ÔHIRA (1969) from Is. Iriomotejima in the Yaeyama group of the Ryukyu Islands. Later, it was synonymised with *P. variegatus* (CANDÈZE, 1873) by ÔHIRA (1971). As a result of close re-examination of the specimens from the Ryukyu Islands, the author concluded that *P. kadesanus* is not conspecific with *P. variegatus* but a good species.

3. 八重山諸島に分布するカデサホソキコメツキ (Figs. 1; 2)

本種は1968年8月に、西表島船浦で37個体を採集した標本に基づいて *Procraerus kadesanus* と命名、1969年に新種として筆者が記載した体長7mm内外の黄橙色をした種である。原記載以降に ÔHIRA (1970a) が西表島大原から1雌個体、大平 (1991) が黒島から1雌個体、大平 (1998) が小浜島から1雌1雄個体、大平 (1999) が波照間島から3雄4雌個体を記録しているため、現在では八重山諸島の小浜島、黒島、波照間島、西表島の4島嶼に分布することが判明している。

本種は海浜性で、成虫は海浜に生育するシマシラキやモンパノキの花に飛来することが判明しているが、波照間島では海岸から少し離れた「ブリブチ公園」での灯火採集で見出している。

形態の概要

体長は7mm内外。体は船型で背面は膨隆する。体は黄橙色で光沢はやや鈍い。頭部や前胸背板の大部分、上翅上と会合線部には図示したような変異のある黒斑を生じる (Fig. 1A)。触角と肢は黄褐色、体毛は黄橙色で短い。

頭部の前頭部はやや扁平状、前頭横隆線はよく発達し、前縁は緩く外方に湾曲するか横位の切断状である (Fig. 1B[↑])。触角は短く、末端は前胸背板の後角に達しない (Fig. 1A[↑])。第2節は短小で幅よりやや長く、第3節は倒円錐状で第4節から鋸歯状を呈し、第4節は第3節の約1.5倍の長さで、節には縦隆起線は生じない (Fig. 1F)。

前胸背板は弱い台形状で、両側の後半は平行状、後角は短く後方に伸長する (Fig. 1H)。背面は膨隆し、全面に円形状の点刻をほぼ一様にやや密に分布する (Fig. 1G)。前胸腹板突起は前肢基節を越えて弱く内方に湾曲して後方伸長し、末端近くで段刻は生じない (Fig. 1C)。小盾板は三角形。上翅の条線は深く押し、間室部は不規則な横しわ状である。

雄交尾器の背面からの外形は図示したようで、中央突起は細長く、末端に漸次細まって末端は鈍くとがる (Fig. 1I)。また、側突起は短小で、末端はやや斜め内方への切断状であるし、外側縁は直線状である (Fig. 1J[↑])。

雌内部生殖器の外形は図示したようで、Colleteriumには目立つような袋状の一对の Colleterial glands は生じなく、内部にT形状をした1個の硬片を有し (Figs. 1E; 2)。Bursa copulatrix内には剛毛と太短い突起状毛とを不規則に分布している (Figs. 1D; 2)。また、そこには中央部と末端部には各1本の付属腺 (Accessory gland) を生じているが、末端から伸びる付属腺は途中で2本に分枝し、その1本の末端は Sphermatheca に達する腺と思われる。

分類について

西表島で見出された個体については、原記載以降に大平 (1971) は、CANDÈZE (1878) が Aru 島から *Ludius variegatus* と命名して新種として記載した種と同種であるとしたので、現在ではこの学名で扱われている。しかし、最近になって、東南アジアの各地に分布するこの種とその近似種をまとめた SCHIMMEL (1999) は、このグループに含まれる種として13種 (うち8種は新種) を報告した。また、ÔHIRA (1970b) が台湾の紅頭嶼 (Lanhsu Island) にも西表島と同種が分布するとしたが、台湾産は SCHIMMEL (1999) により *Procraerus sauteri* と命名、新種として記載されている。その他、VAN ZWALUWENBURG (1959) が *P. variegatus* のシノニムとしたいくつかの種については独立種として扱われている。

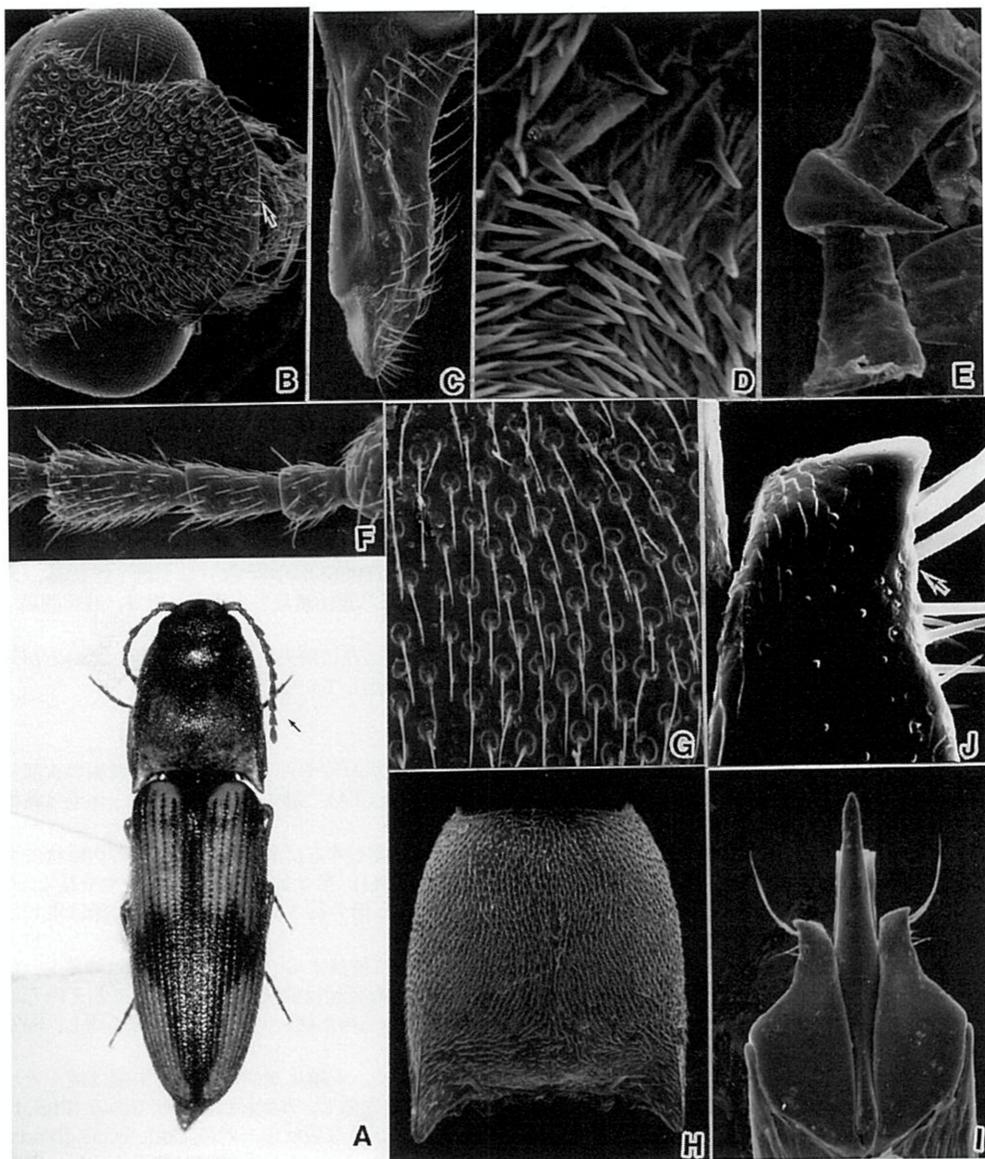


Fig. 1. A-J. Some adult structure of *Procaerus kadesanus*, male (except for D and E which are of a female), Is. Iriomote-jima..

A, adult, body length 7 mm; B, head, dorsal aspect; C, prosternal process, lateral aspect; D, some spines in bursa copulatrix; E, T-shaped sclerotized piece in colletelum; F, 2nd to 4th segments of antenna; G, some punctures on the disc of pronotum; H, pronotum, dorsal aspect; I and J, apical portion of male genitalia, dorsal aspect.

筆者が西表島から新種として記載した *P. kadesanus* については、SCHIMMEL (1999) は “Species incertae sedis” の扱いとされているが、筆者の原記載には雄交尾器や触角などが付されているので、これを参照していればこのような誤解はなかったと思われる。

これらとは別に筆者は、高橋敬一博士が Palau 諸島で採集された西表島産とよく類似した数個体の雌雄標本を検しているが、これは SCHIMMEL (1999) により *P. semperi* と命名され新種として記載されている。SCHIM-

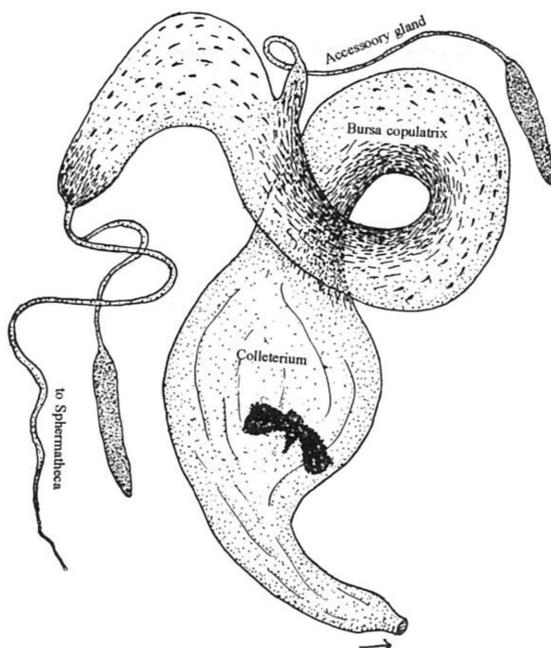


Fig. 2. Outline of the female internal reproductive organs of *P. kadesanus*, Is. Iriomote-jima of the Ryukyu Islands.

MEL (1999) は雄交尾器の外形とともに、雌内部生殖器や腰板の形態なども図示しているが、雌内部生殖器の外形や内部に生じる剛毛や突起状毛（T字状の硬片は扱われていない）などは、部分的に略図で示されていて、これでは種の識別には役立たない。いずれにしても、内部生殖器の硬針や突起状毛の分布状態や外形などは個体による変異があるので、複数以上の個体を検してどれが正常かを判断することが必要である。このことは、筆者が日本産の本科の他の種についても言及してきたところである。

筆者は現在でも大平 (1971) が本種やその近似種について示した見解や VAN ZWALUWENBURG (1959) による地域変異の考えは、大筋において間違っていないと考えている。SCHIMMEL (1999) の研究もそれなりに評価できるが、東南アジアの各地に分布するこの属やその近属の種群は多種多様に分化しており、それぞれの地域産を分類上での独立種や亜種や変種に位置づけるかは別にして、さらに詳しい再検討が必要であると考えている。また、SCHIMMEL (1999) が台湾（紅頭嶼を含むかどうかは不明）から新種として記載した *P. sauteri* の雄交尾器の側突起の外縁は外方に湾曲しており、腰板の形態も異なっているので、八重山諸島産とは別種であると思われる。ここでは琉球八重山諸島産については以下のように再び独立種として位置付けすることにした。

本種は系統的には真の *Procaerus* 属の種ではないが、東南アジアにはこれに類似した多様な形態に分化した種群が多数分布している。SCHIMMEL (1999) もこれらの種群については幾つかの属を新設している。しかし、現在の段階でこれらを系統的に再整理することは困難であるので、属名については従来の属名で記録するに留める。

***Procaerus kadesanus* ÔHIRA, 1969, sp. rev.**

Procaerus kadesanus ÔHIRA, 1969, Bull. Japan ent. Academy, 4(6): 30 (Is. Iriomote-jima).

Procaerus variegatus ÔHIRA, 1971, Kontyû, Tokyo, 39: 65 (Is. Iriomote-jima), (nec CANDÈZE, 1878 from Aru Is.).

Distribution: Yaeyama group of the Ryukyu Islands.

引用文献

- ÔHIRA, H., 1969. The Elateridae of the Ryukyu Archipelago, VII. (Coleoptera). *Bull. Japan ent. Academy*, 4(8): 27-32.
 ÔHIRA, H., 1970a. The Elateridae of the Ryukyu Archipelago, VIII. (Coleoptera). *Bull. Aichi Univ. Educ.*, 19 (Nat. Sci.): 103-111.

- OHIRA, H., 1970b. Elaterid-beetles from Lan-hsu I. of Formosa in 1968. *Bull. Japan ent. Academy*, 6(1): 17-21.
- 大平仁夫, 1971. 日本産コメツキムシ科の知見 (VI). *Kontyû, Tokyo*, 39(1): 63-66.
- 大平仁夫, 1991. 黒島未記録のコメツキムシ 2 種. *昆虫と自然*, 26(14): 21.
- 大平仁夫, 1998. 琉球・小浜島のコメツキムシ. *北九州の昆虫*, 45(2): 108.
- 大平仁夫, 1999. 波照間島のコメツキムシ採集記. *北九州の昆虫*, 46(1): 13-15.
- SCHIMMEL, R., 1999. Die Magapenthini-Arten Sude- und Sudostasiens, (*Procaerus*, *Ectamenogonus*, *Xanthopenthes*, *Dolinus* n. gen., *Giradelater* n. gen. und *Preusselater* n. gen. (Insecta: Coleoptera, Elateridae). *Pollichia-Buch*, (38): 299 pp.
- VAN ZWALUWENBURG, 1959. Some type designations, with notes on Pacific Elateridae (Coleoptera). *Pacific. Insects*, I(4): 347-414.

(岡崎市舞木町)

タグチトゲナシトゲハムシ (ハムシ科, トゲハムシ亜科) の富山県下の新産地

鈴木 邦 雄

New localities of *Leptispa taguchii* CHÛJÔ, 1956 (Chrysomelidae, Hispinae) in Toyama Prefecture, Honshu, Japan

Kunio SUZUKI

タグチトゲナシトゲハムシ *Leptispa taguchii* CHÛJÔ, 1956 は、ハムシ科、トゲハムシ亜科に属し、本州・九州に分布している。寄主であるススキは普遍的に存在するにもかかわらず、かなり稀な種と考えられ、既知産地もきわめて限られている。鈴木・藤本(1997)は、本種を日本海側からは初めて富山市呉羽丘陵から記録したが、その時点で明らかになっていた本種の地理的分布についても未公表データを含めて詳しく述べた。それによると、その時点での既知産地は、故中條道夫博士が本種を記載された際(CHÛJÔ, 1956)の模式産地である埼玉県(川越市)、東京都(青山)、福岡県(英彦山)の他、東北地方(宮城県:国見峠, 仙台市)・関東地方(栃木県:足利市, 小山市, 宇都宮市, 那須町など; 茨城県:つくば市)などであった。その後、筆者の知る限り、能登半島(石川県:珠洲市; 石川むしの会・百万石蝶談会, 1998)からも報告がなされている。

筆者は、その後も、富山県下各地で本種を採集しているが、ここでは取り敢えず1999年の採集データのみを記録しておく。

調査標本: 7 exs., 中新川郡上市伊折(標高 400 m), 18-V-1999, K. SUZUKI, K. SATÔ & T. HORI leg.; 1 ex., 同所, 8-VII-1999, K. SUZUKI & T. HORI leg.; 1 ex., 同所, 29-VII-1999, K. SUZUKI & T. HORI leg.; 4 exs., 富山市八尾町三田(標高 100 m), 26-V-1999, K. SUZUKI & T. HORI leg.; 1 ex., 同所, 31-V-1999, T. HORI leg.; 1 ex., 富山市八尾町桐谷(赤倉)(標高 400 m), 31-V-1999, K. SUZUKI leg.; 32 exs., 魚津市奥平沢(標高 400 m), 30-V-1999, K. SUZUKI & K. SATÔ leg.; 6 exs., 同所, 26-VI-1999, K. SUZUKI leg.; 10 exs., 同所, 6-VIII-1999, K. SUZUKI leg.

富山県下では、低丘陵地～低山帯の溪流沿いに見られるススキ草原にはほぼ普遍的に生息しているものと推測される。本種の既知産地はきわめて限られているが、分布域の広さと寄主であるススキが普遍的に見られることから、同様の環境を徹底的に調査すれば各地で発見される可能性が高い。本種の生息地では、ススキを寄主とするツマキタマノミハムシ *Sphaeroderma apicale* BALY, 1874 (トビハムシ亜科) とクロルリトゲトゲ *Rhadinosia nigrocyanea* (MOTSCHULSKY, 1861) (トゲハムシ亜科) の 2 種がほとんど常に同所的に見られた。

末筆ながら、野外調査に協力された佐藤謙治・堀 卓雄両君に感謝する。

引用文献

- 石川むしの会・百万石蝶談会, 1998. 石川県の昆虫. 537 pp. 石川県.
- 鈴木邦雄・藤本浩二, 1997. 富山県から初めて記録されるハムシ類 (I). 甲虫ニュース, (117): 5-6.
(930-8555 富山市五福 富山大学理学部生物学教室)

富山県から初めて記録されるハムシ類 (2)

トゲアシネクイハムシ (改称) (ネクイハムシ亜科):

付. 富山県のネクイハムシ類の現在の生息状況

鈴木邦雄・松村洋子・安江 梓

Chrysomelid beetles recorded for the first time from Toyama Prefecture,
Honshu, Japan (2)—*Donacia* (*Cyphogaster*) *lenzi* SHOENFELDT, 1888,
with special reference to the present circumstances of the
donaciine fauna of Toyama Prefecture

SUZUKI, K., Y. MATSUMURA & A. YASUE

トゲアシネクイハムシ (改称) *Donacia* (*Cyphogaster*) *lenzi* SHOENFELDT, 1888 は、日本の四大島と佐渡島・極東ロシア・朝鮮半島・中国・台湾・フィリピンなどに広く分布するが、富山県からは記録がなかった。筆者らは、富山県下の3ヶ所の溜め池で、いずれもヒツジグサ *Nymphaea tetragona* GEORGI を加害していた本種を多数採集することができたので報告する。本種は、隣接4県 (石川・岐阜・長野・新潟) の全てから報告されていたので、富山県下にも生息していることは確実だと推測していた。また、この機会に、富山県産ネクイハムシ類の現在の生息状況についても概観しておきたい。

調査標本: 8♂♂8♀♀, 氷見市吉懸, 10-VII-2005, K. SUZUKI leg.; 22♂♂24♀♀, 同所, 25-VII-2005, K. SUZUKI & A. YASUE leg.; 9♂♂10♀♀, 同所, 7-VIII-2005, K. SUZUKI & Y. MATSUMURA leg.; 1♂4♀♀, 富山市婦中町花水谷, 11~12-VII-2005, K. SUZUKI leg.; 1♂4♀♀, 同所, 17~18-VII-2005, K. SUZUKI & Y. MATSUMURA leg.; 2♂♂4♀♀, 同所, 29-VII-2005, K. SUZUKI leg.; 4♂♂8♀♀, 同所, SUZUKI, K., Y. MATSUMURA & A. YASUE leg.; 12♂♂9♀♀, 富山市婦中町吉住, 11~13-VII-2005, K. SUZUKI & Y. MATSUMURA leg.; 19♂♂23♀♀, 同所, 17~18-VII-2005, K. SUZUKI leg.; 17♂♂5♀♀, 同所, 29-VII-2005, K. SUZUKI leg.; 13♂♂1♀, 同所, 8-VIII-2005, SUZUKI, K., Y. MATSUMURA & A. YASUE leg.

本種の寄主植物としては、ヒツジグサ以外にジュンサイ・ヒルムシロ属の1種・ハスなど (cf. 野尻湖昆虫グループ, 1985) が報告されているが、富山県下では、それらの生育する溜め池は各地に散在するものの、これまでのところ、それらのいずれからも発見できていない。

本種を採集した上記3ヶ所のうち、富山市婦中町吉住の溜め池でのみ近縁のイネネクイハムシ *D.* (*Cyphogaster*) *provosti* FAIRMAIRE, 1885 との共存を確認した。同所において、7月11~8月8日に7度の採集を試みた。本種対イネネクイハムシの採集個体数は99:15で、ほぼ6:1となり、本種の方が圧倒的に優占的であった。イネネクイハムシは、全て本種同様ヒツジグサの浮葉上で採集したが、加害しているかどうかは確認できなかった。同溜め池には、イネネクイハムシの寄主として知られているヒルムシロ属の1種がヒツジグサと混生しているので、それを加害している可能性もある。鈴木・藤本 (1997) が氷見市一刎 (ひとはね) より報告したイネネクイハムシ個体群は、採集者の観察によればヒルムシロから得られたものであるが、2005年の調査で明らかになった県下の他の6ヶ所の生息地ではいずれもハスを加害していた。また、野尻湖研究グループ (1985) は、両種が「だいたいにおいてすみわけているが、時に共存することがある」と報告しているが、婦中町吉住の溜め池では、棲み分けているようには思われなかった。なお、吉住からわずか500mほど離れた砺波市鷲谷 (みさごだに) のハスの植栽田ではイネネクイハムシが多数発生していることを観察している。

本種には「ガガブタネクイハムシ」あるいは単に「ネクイハムシ」の和名が充てられてきた。イネネクイハムシがガガブタを加害することが知られているので、本種がガガブタを加害する可能性は否定できないものの、確実な報告はないようであり (イネネクイハムシと混同されていた可能性がある)、林 (2005) は疑問視している。また、亜科の総称名と特定の種名とが同じであることは無用な混乱のもとになり、避けるべきであろう。本種は、イネネクイハムシに外部形態が酷似しているが、いくつかの鑑別形質によって明瞭に区別できる。イネネクイハムシに比較して触角が太く、第2節と第3節がほぼ等長であることその他、特に後腿節に♂では2個の、♀では1個の大きな歯状突起を持つことから、今後は「トゲアシネクイハムシ」と呼ぶことを提唱したい。

以下、富山県のネクイハムシ類の現在の生息状況について、隣接諸県と比較しながら若干の考察をしておきたい。富山県下に生息するネクイハムシ類は、これまでにトヤマオオミズクサハムシ *Plateumaris con-*

stricticollis toyamensis TOMINAGA et KATSURA, 1984 (TOMINAGA & KATSURA, 1984), キヌツヤネクイハムシ *P. sericea* (LINNAEUS, 1761) (cf. 富山県昆虫研究会, 1979), キンイロネクイハムシ *Donacia* (*Donaciomima*) *japana* CHŪJŌ et GOECKE, 1956 (鈴木・板倉, 1986), ホソネクイハムシ *D. (Donaciomima) vulgaris* ZSCHACH, 1788 (cf. 富山県昆虫研究会, 1979), ヒウラヒラタネクイハムシ *D. (Donaciomima) splendens hiurai* KIMOTO, 1983 (鈴木・藤本, 1997), イネネクイハムシ (鈴木・藤本, 1997) の 6 種が報告されている。これらのうち、ホソネクイハムシは、確実な産地としては新潟県西南部が日本海側の南限であり (cf. 林, 2004), 富山県東部に生息している可能性を否定しきれないが、上記の報告は誤同定に基づく可能性が高く、筆者らもこれまでのところ確認できていないので、現時点では除外しておきたい。従って、富山県に確実に生息しているネクイハムシ類は、現時点ではトゲアシネクイハムシを含め、2 属 6 種ということになる。

林 (2005) によれば、石川県下には 4 種、岐阜県下には 7 種、長野県下と新潟県下にはそれぞれ 11 種のネクイハムシ類が分布している。トゲアシネクイハムシの発見によって、石川県産の 4 種は、すべて富山県にも分布していることが明らかになった。岐阜県下から記録があって富山県下から記録のないツヤネクイハムシ *D. (Donaciomima) nitidior* (NAKANE, 1963) とカツラネクイハムシ *D. (Donaciomima) katsurai* KIMOTO, 1981 の 2 種は、既知の地理的分布状況から、富山県下で生息している可能性はほとんどないと推測される。長野県下から記録があって富山県下から記録のない 5 種のうち、ホソネクイハムシのみは既述のように県東部に生息地の存在する可能性を否定できないが、ツヤネクイハムシ、クロガネネクイハムシ *D. (Donaciomima) flemora* GOECKE, 1944, アシボソネクイハムシ *D. (Donaciomima) sparganii gracilipes* JACOBY, 1885 およびコウホネネクイハムシ *D. (Donacia) ozensis* NAKANE, 1954 の 4 種は、既知の地理的分布状況から、もしも生息しているとすれば県東部しか考えられないが、県東部にこれらの種の生息可能な環境はほとんど存在しないため、生息している可能性も極めて低いと推測される。隣接 4 県のうち、新潟県下のみから報告があるキアシネクイハムシ *D. (Donaciomima) bicoloricornis* CHEN, 1941 とフトネクイハムシ *D. (Donaciomima) clavareau* JACOBSON, 1906 の 2 種も、既知の地理的分布状況から、富山県下で生息している可能性はほとんどないと推測される。筆者らの一人鈴木は、北アルプス立山連峰の高山帯の池塘などには、平地にも普遍的に生息するキヌツヤネクイハムシに代わって、極東ロシアや樺太から東北地方まで生息している近縁のシラハタミズクサハムシ *Plateumaris shirahatai* KIMOTO, 1971 がその代替種かつ氷河期の遺存的種として生息している可能性があるとして推測して調査してきたが、これまでのところいずれの場所においても生息しているのは前者のみで、後者は発見できていない。富山県産ネクイハムシ類 6 種のうち、トヤマオオミズクサハムシとヒウラヒラタネクイハムシの 2 種は、これまでのところ県下の産地はそれぞれ 1 ケ所のみと局限されている。また、キンイロネクイハムシの生息地も、鈴木・板倉 (1986) が報告した 1 ケ所のみが知られていた。その生息地の個体群は、溜め池が埋め立てられたため絶滅してしまっただが、2005 年の調査で近隣の数ヶ所の溜め池や湿地で生存していることを確認した。しかし、富山県下の産地は、県中央部に局限され、その他の地域ではまったく発見できていない。イネネクイハムシは、氷見市の石川県境の 1 ケ所からのみ記録があるが、同所では再確認できていない。しかし、2005 年の調査で、県の西部、中部および東部の計 6 ケ所で、1 ケ所を除いていずれもハスを加害していた本種の生息を確認できた。なお、富山県下のネクイハムシ類の生息環境は、キヌツヤネクイハムシを除く他の 5 種にとってはいずれも極めて厳しい状況にあると言わざるをえない。以上の観察事実および考察から、富山県のネクイハムシ類は、今後の調査によっても種数の増える可能性は極めて低いものと推測される。県下各地のネクイハムシ類各種の生息状況については、いずれ稿を改めて報告する予定である。

引用文献

- 林 成多, 2004. 総説・日本産ネクイハムシ亜科, ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.
 林 成多, 2005. 日本産ネクイハムシ図鑑—全種の解説—. 月刊むし, (408): 2-18.
 野尻湖研究グループ, 1985. アトラス・日本のネクイハムシ—化石同定への手びき—. 182 pp.
 鈴木邦雄・藤本浩二, 1997. 富山県から初めて記録されるハムシ類 (1). 甲虫ニュース, (117): 5-6.
 鈴木邦雄・板倉範枝, 1986. キンイロネクイハムシ (鞘翅目, ハムシ科) 富山県に産す. 富山市科学文化センター研究報告, (9): 93-95.
 TOMINAGA, O. & K. KATSURA, 1984. Studies on the Japanese Donaciinae (Coleoptera: Chrysomelidae) 2. Notes on the geographical diversity of *Plateumaris constricticollis*, with description of an allied new species. *Bull. Osaka Mus. Nat. Hist.*, **37**: 25-40.
 富山県昆虫研究会編, 1979. 富山県の昆虫. 545 pp. 富山県.
 (鈴木・松村・安江: 930-8555 富山市五福 富山大学理学部生物学教室)

福岡県 2 例目となるチャイロチビゲンゴロウと ヒコサンセスジゲンゴロウの採集記録

中 島 淳

筆者は福岡県において 2 例目となるチャイロチビゲンゴロウ及びヒコサンセスジゲンゴロウを最近採集しているの、ここに報告する。チャイロチビゲンゴロウは約 60 年ぶりの、またヒコサンセスジゲンゴロウは約 30 年ぶりの県内からの記録である。なお、種の同定は森・北山(2002)によった。

1. チャイロチビゲンゴロウ *Liodesus megagephalus* (GSCHWENDTNER)

1♂, 福岡県福岡市東区松崎, 8. VII. 2001, 筆者採集保管。

本種は、海岸線の塩水の混じるような水域に好んで生息するという日本産ゲンゴロウ類の中では珍しい生態を持つ種類で、本州以南の沿岸域に広く分布している(森・北山, 2002)。高倉(1989)及び野村(1993)によれば、福岡県ではこれまで KAMIYA(1938)による、福岡市から約 60 km 沖にある孤島・沖ノ島からの 1 例の記録しか知られていない。周辺地域における記録としては、佐賀県東松浦郡からのものがあるのみであり(野村ほか, 1996)、北部九州地域ではかなり局地的な分布を示しているようである。

今回採集したのは、住宅地の中にある水田で、水生昆虫はあまり見られず、カブトエビやホウネンエビ、カイエビなどの甲殻類が豊富に生息していた。当採集地は海からは直線距離で約 2 km と沿岸部ではあるが、一般的に言われている生息環境とは異なっており興味深い。筆者は、沖縄県西表島において同様にやや内陸の水田的環境で本種を採集したことがあり、時にはこのような水域も生息場所として利用されるものと思われる。

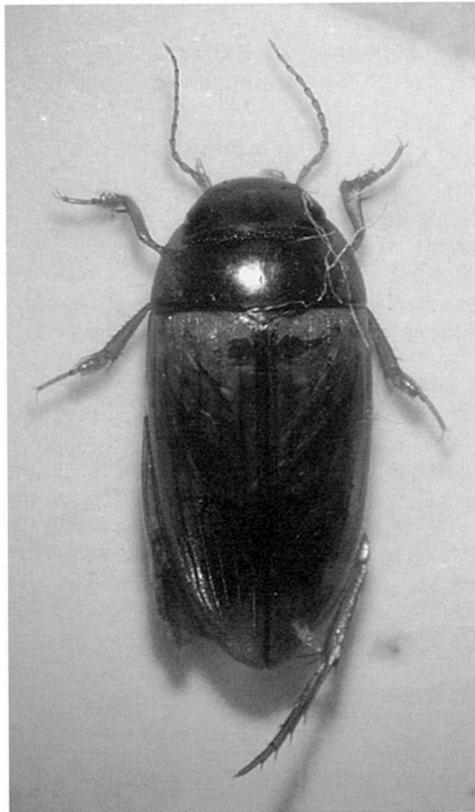


図 1. 福岡県 2 例目のヒコサンセスジゲンゴロウ。



図2. 同個体の交尾器中央片.

2. ヒコサンセスジゲンゴロウ *Copelatus takakurai* SATO (図1, 2)

1♂, 福岡県大平村下唐原, 2. XI. 2003, 筆者採集保管.

本種は, 福岡県添田町英彦山において1973年に採集された標本に基づいて記載された種で, その後九州では長崎県を除く各県, 及び本州では広島県, 静岡県で相次いで発見されている. しかし, 原記載地である福岡県内においてはその後全く採集されておらず, 福岡県版レッドリスト(福岡県, 2001)では絶滅危惧I類として掲載されるなど, その生息が危ぶまれていた.

採集地は落葉樹や杉に囲まれた薄暗い場所にある小さな池で, 同所的にコウベツゲンゴロウやコツゲンゴロウ, また多数のホソセスジゲンゴロウが得られた. 翌2004年7月にも当地を訪れたが, 追加個体は得られなかった.

末筆ながら, 今回太平村の採集地周辺を案内していただいた岡部遊太氏, 北原真琴氏, 及び福岡県東部地域におけるゲンゴロウ類の生息状況について種々ご教示いただいた北九州高校の井上大輔氏にこの場を借りて厚くお礼申し上げる.

参考文献

- 福岡県, 2001. 福岡県の希少野生生物—福岡県レッドデータブック—. 447 pp. 福岡県環境部自然保護課.
 KAMIYA, K., 1983. A systematic study of the Japanese Dytiscidae. *J. Tokyo Nogyo Daigaku*, (5): 1-68.
 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 231 pp. 文一総合出版.
 野村周平, 1993. 福岡県の水生甲虫に関する資料. 新筑紫の昆虫, (2): 5-21.
 野村周平・溝上誠司・大塚健之, 1996. 佐賀県の水生甲虫. 佐賀県生物部会編, pp. 249-262, 佐賀県の生物.
 高倉泰男, 1989. 福岡県の甲虫相. 526 pp. 葦書房.

(九州大学大学院水産実験所)

○東京都におけるキイロフナガタコメツキの採集例

キイロフナガタコメツキ *Heteroderes inexpectatus* KISHII, 1969 は, 東関東地域に生息するたいへん綺麗なコメツキムシである. 1962年に茨城県阿見町で最初に採集されて以来, 茨城県, 千葉県, 東京都から点々と記録されているが, いずれの地域でも個体数は少ないようである.

筆者らは, 千葉県に隣接する東京都の埋め立て地において本種を発見することができたので, ここに記録しておきたい.

2 exs., 東京都江戸川区葛西臨海公園, 31. VIII. 2005, 川田一之採集(鈴木保管); 1 ex., 同地, 13. IX. 2005, 鈴木 互採集.

今回採集された個体は, いずれも埋め立て地の草地にあった石の裏に止まっていたもので, 同時にマダラチビコメツキ *Prodorasterius agnatus* (CAN-

DÈZE, 1873) も採集された.

これまでに記録された本種の採集例を見ると, 内陸部よりも海浜地域に集中していることがわかる. また, 灯火に複数の個体が誘引された例も知られているので, 海浜近くで灯火採集をおこなえば, 発見される機会はさらに増えると考えられる. 本種の生態や分布域については, 不明な点が多いが, 今後の調査で明らかにされることを期待したい.

参考文献

- 鈴木 互, 1986. コメツキムシ科. 板橋区昆虫類等実態調査(昆虫類・真正クモ類・両生類・爬虫類・哺乳類): 60-62, 95-97. 東京都.
 鈴木 互, 1988. 千葉市内の工場でライトトラップによって採集されたコメツキムシ. 日本の生物, 2(11): 54.
 (東京都世田谷区, 鈴木 互;
 神奈川県川崎市, 川田一之)

日本産トドマツカミキリ属に関する追記

新里 達也

2001年刊行の東海甲虫誌(穂積俊文博士記念論文集)に寄稿した「日本産トドマツカミキリ属の再検討」では、同属の日本産5種について、研究史を振り返るとともに、分類学的課題と分布記録の整理を行った。しかし、その後になって、見落とした資料の存在に気づき、また追加知見も得られたことから、若干の追記の必要に迫られた。本稿では、とくにホソトドマツカミキリ *Tetropium gracilicorne* HAYASHI および移入種 *T. velutinum* LeCONTE について覚え書きを記しておく。

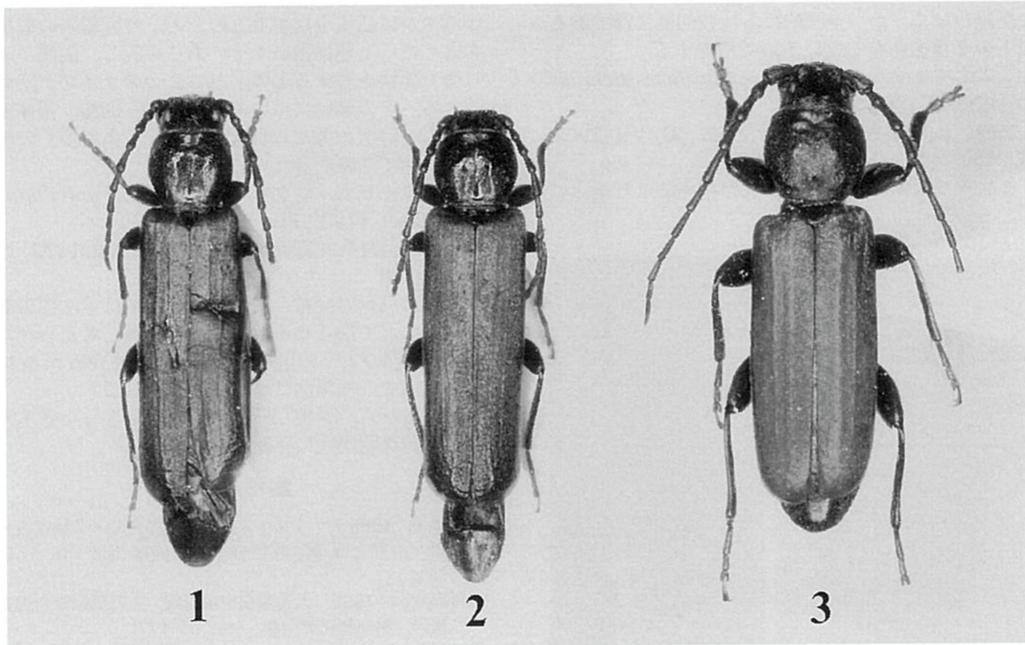
本報を準備するにあたり、大林延夫博士(愛媛大学)および高桑正敏博士(神奈川県立生命の星・地球博物館)には所蔵標本貸与の許可を、S. LINGAFELTER 博士(スミソニアン博物館)には北米産本属種の種名同定確認をしていただいた。お名前を記して感謝申し上げたい。

1. ホソトドマツカミキリ *Tetropium gracilicorne* HAYASHI

検視標本: 1♂, "Horoka" "Hokkaido" "VII 31. 1968" "H. Kawai Leg."; 1♂, "Horoka" "Hokkaido" "VIII 4. 1968" "H. Kawai Leg."

HAYASHI (1968) が *T. gracilicorne* REITTER を日本のファウナに加えたときに検した標本を、今回実検したところ、この2個体は明らかにホソトドマツカミキリ *T. gracilicorne* そのものであった。新里(2001)においてもこの誤認を推測しているが、HAYASHI (1968) の記録の根拠となった標本が再発見されたため、あえて写真とともに記録の訂正を行っておく。したがって、*T. gracilicorne* の日本初記録は新里(1998)ということになる。

本種の分布として、新里(2001)は北海道、極東ロシアおよび中国東北をあげているが、このほかに DANILEVSKY (1988) による色丹島の記録があり、本種は千島列島にも分布しているらしい。DANILEVSKY (1988) は色丹島産をもとにロシア新記録としているが、色丹は日本固有の領土であり、NISHATO & AKITA (2001) の沿海州の記録がロシアからの新記録となるのはいうまでもない。また、最近になって長尾(2004)は、サハリンと稚内を結ぶ航路の船上で採集した本種を記録し、採集状況から、「ロシア側のコルサコフ港付近から船上に飛来した個体であろう」と推定している。これらの記録を整理すると、ホソトドマツカミキリは北海道、千島、サハリン、沿海州および中国東北の亜寒帯林に比較的広く分布することになる。



Figs. 1-2. ホソトドマツカミキリ *Tetropium gracilicorne* HAYASHI. HAYASHI (1968) により *T. gracilicorne* REITTER の日本新記録に使用された個体。

Fig. 3. *Tetropium velutinum* LeCONTE. 茨城県水海道産。

2. *Tetropium velutinum* LECONTE

檢視標本: 1♂, "Mitsukaidō" (Ibaragi Pref.) "VIII 1983" "K. Akiyama leg."

LINSLEY (1962) によると, 本種はバンクーバー島を基準産地とし, 北米西海岸およびロッキー山脈北部に広く分布するという。ツガやトドマツ類などの針葉樹の生木を加害する有名な森林害虫のようである。日本産に近縁な種はいない。

上記個体は, 故秋山黄洋氏がかつて材木企業に勤務の折に, 茨城県水海道にある同社の集材場で採集された。この標本は, その直後に大林延夫博士を経て新里に託されたが, 種名未調査のままに国外産個体として標本箱に入れておいた。その後, 手元の本属の標本を再調査したときに北米の *T. velutinum* であることを知り, 念のためにスミソニアン博物館の LINGAFELTER 博士に再確認を依頼し, 正確に種名同定することができた。なお, 小島・林 (1969) には, 輸入材についてきた外国産のカミキリムシとして北米産の本種雄個体が図示されており, 北米材とともに比較的頻繁に移入されている外来種のようである。

引用文献

- DANILEVSKY, M. L., 1988. New and little-known species of Longicorn beetles (Coleoptera, Cerambycidae) from the Far East. *Zool. J.*, 67: 367-374.
- 小島圭三・林 匡夫, 1969. カミキリ編. 原色日本昆虫生態図鑑 I. 295 pp., 56 pls. 保育社, 大阪.
- LINSLEY, E. G., 1962. The Cerambycidae of North America. Part II. Taxonomy and classification of the Parandrinae, Prioninae, Spondyliinae and Aseminae. 103 pp., 1 pl. Univ. California Press, San Francisco.
- 長尾 康, 2004. 国際航路上でホットドマツカミキリを採集. 月刊むし, (404): 43.
- 新里達也, 1998. 日本産トドマツカミキリ属の再検討(甲虫目・カミキリムシ科). 日本鞘翅学会第 11 回大会講演要旨集. p. 7.
- 2001. 日本産トドマツカミキリ属の再検討. 穂積俊文博士記念論文集「東海甲虫誌」, 325-339.
- NIISATO, T., & K. AKITA, 2001. Distributional records of the *Tetropium* species (Coleoptera, Cerambycidae) from Far East Russia. *Elytra, Tokyo*, 29: 29-32.

(東京都国分寺市)

○山梨県大菩薩嶺のカッコウムシ 2 種

山梨県大菩薩嶺のカッコウムシについては, 奥村ほか (1969) が 5 種を報告しているが, 筆者はこれに記録がなく, かつ全国的にも比較的稀な種である以下の 2 種を所有しているので報告する。

1. ムネアカマルカッコウムシ *Allochotes dichrous* (LEWIS, 1891) (Fig. 1)

1 ex., 山梨県大菩薩嶺日川林道, 21. VII. 2004, 露木繁雄採集

ミズナラ大木の樹皮のはがれた枯死部より得られ

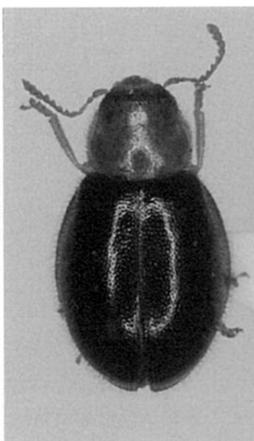


Fig. 1



Fig. 2

た。日本全国に分布するがいずれの既産地でも数は少ない。本種は甲虫図鑑 (宮武, 1985) に図示・解説された「上翅が黒藍色でツヤはやや鈍く, 両側はゆるやかに弧状を呈するもの」と, 今回報告の個体のように「上翅は強いツヤのある黒色で, 両側がより強く弧状を呈するもの」との 2 つのタイプが認められる。その違いについては, 性差, 別種, 個体変異などの解釈が考えられるが, 今後, より多くの個体を調べて結論を得たい。

2. シロオビカッコウムシ *Tarsostenus univittatus* (Rossi, 1792) (Fig. 2)

1 ex., 山梨県大菩薩嶺日川林道, 2. VII. 1972, 近藤茂昭採集

本種は汎世界分布の種で, 我が国では主に都市部の人家などで得られることから移入種と考えられている。今回のように自然度が高い標高 1,000 m を超える地域での採集例は珍しいと思われる。

末筆ながら, 貴重な標本をご恵与下さった露木繁雄, 近藤茂昭両氏に感謝する。

参考文献

- 宮武睦夫, 1985. カッコウムシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛の編著, 原色日本甲虫図鑑 (III): 146, 151-161.
- 奥村尚ほか, 1969. 大菩薩嶺甲虫目録, 大菩薩嶺総合調査報告. 動植物研究会報, (14): 93-177.

(東京都大田区, 酒井 香)

○沖縄島のノムラヒメドロムシ

筆者らは従来、奄美大島固有とされていたノムラヒメドロムシ *Nomuraelmis amamiensis* M. SATO を沖縄島の2カ所で採集したので報告する。

2 exs., 沖縄県名護市源河, 1. VII. 2003, 中島採集・保管。

2 exs., 同地点, 28. IX. 2004, 中島採集・保管。

1 ex., 沖縄県国頭村佐手, 22. V. 2005, 林採集・

保管。

名護市では、源河大川に流れ込む細流から、多数のウエノツヤドロムシ *Urmaelmis uenoi uenoi* (NOMURA) に混じって採集された。国頭村では、佐手川下流部の瀬で多数のオキナワミゾドロムシ *Ordobrevia amamiensis okinawana* NOMURA に混じって採集された。

なお、佐藤・吉富(2005)では、本種が沖縄島に産するらしいとの記述があるが、本報告が初の正式な記録となる。

参考文献

佐藤正孝・吉富博之, 2005. コウチュウ目(鞘翅目) Coleoptera. 川合禎次・谷田一三(編), pp. 591-658. 日本産水生昆虫科・属・種への検索. 東海大学出版会, 東京.

(林 成多: ホシザキグリーン財団;
中島 淳: 九州大学大学院水族生産学講座)

○ババチビドロムシの九州(宮崎県)からの採集記録

ババチビドロムシ *Babalimnicus masamii* M. SATO は、海岸岩礁性のチビドロムシの一種である。本種はこれまでに屋久島から与那国島にかけての琉球列島、および本州(愛知県)から記録されている(SATO, 1994; YOSHITOMI, 1998; YOSHITOMI and SATO, 2001; 吉富・新井, 2004)。筆者は宮崎県において、九州本島初記録となる本種を採集したので、ここに報告する。



図1. ノムラヒメドロムシ国頭村産。



図2. 生息地(国頭村)。

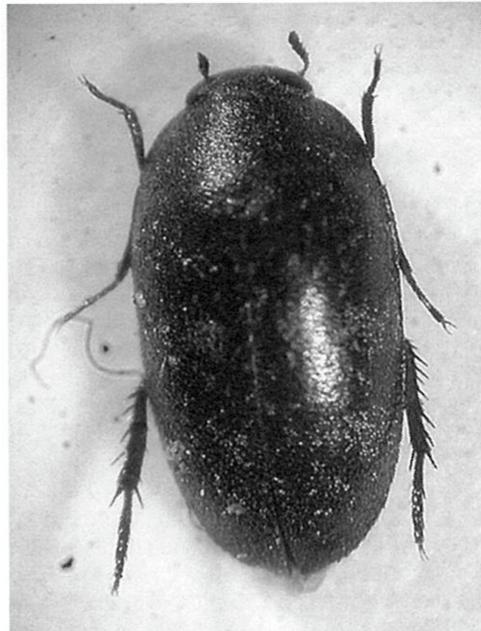


図1. 宮崎県産ババチビドロムシ。

1 ex (図1), 宮崎県延岡市赤水町, 7. VII. 2005, 筆者採集・保管.

採集された場所は, 比較的長く続く岩礁地帯である. 付近を散策していたところ, 跳ねて岩の窪みの水溜りに落下したところを採集した. 本種は, 一般的に満潮時にも水没しない程度の位置の岩石表面の窪みから発見される. 筆者は沖縄本島において, そのように岩の窪みに潜んでいる個体をつつき, 活発に跳ねる様子を観察している. 今回の個体も付近に潜んでいたものが, 人影に驚いて跳ねて, 水溜りに落下したものであろう. あまり時間がなく, 十分に採集することができなかったが, 周辺では他の個体を採集することができなかった.

比較的小さい種であり, あまり採集者の入らない海岸の岩礁地帯に生息しているため目につかないが, 九州から本州の太平洋岸には広く分布しているのではないだろうか. さらなる調査が望まれる.

末筆ながら, 文献等ご教示していただいた, (株)環境指標生物の吉富博之氏, 及び採集に同行していただいた九州大学水産実験所の鬼倉徳雄先生にお礼申し上げます.

引用文献

- SATŌ, M., 1994. Note on the genus *Pseudecinetus* HELLER and its new relative (Coleoptera, Limnichidae). *Special Bulletin of the Essa Entomological Society, Niigata*, (2): 172-177.
- YOSHITOMI, H., 1998. A new record of *Babalimnichus masamii* (Coleoptera, Limnichidae) from Yakushima island. *Elytra, Tokyo*, 26(1): 160.
- YOSHITOMI, H. & M. SATŌ, 2001. Description of the larva of *Babalimnichus masamii* M. SATŌ (Coleoptera: Limnichidae, Thaumastodinae). *Coleopterist's Bulletin*, 55(4): 471-474.
- 吉富博之・新井浩二, 2004. ババチビドロムシの与那国島からの採集記録. 甲虫ニュース, 148: 23.
- (九州大学大学院水産実験所, 中島 淳)

○ヤツクシヒゲヒラタコメツキ岐阜県に分布

ヤツクシヒゲヒラタコメツキ *Orithales serraticornis yatsuensis* KISHII, 1966 は, 長野県八ヶ岳の標高約2,800 mのあたりで採集された体長7.2 mmの1雌に基づいて新種として記載されたが, 現在では旧大陸に分布する種の本州産亜種として扱われている. また, 北海道には別亜種エゾクシヒゲヒラタコメツキ *O. serraticornis yezoensis* MIWA, 1934 が分布しており, この雌雄の形態は大平・保田(2001)が報告している.

本州産亜種は現在のところ長野県(八ヶ岳)と山梨県(鳳凰山)の高山帯から知られているのみで, 鳳凰山産の雄の形態は KISHII (1989) が報告しており, 触角の第2, 3節は短小で, 第4節から鋭く鋸歯状(櫛歯状に近い)をしているので雌雄の識別は容易である.

このたび, 筆者の一人である豊島は, 岐阜県朝日

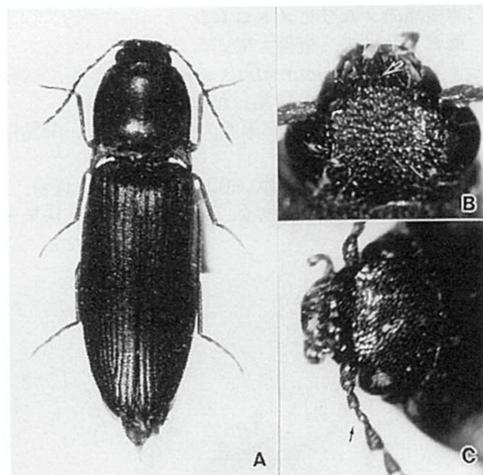


Fig. 1. A-C. ヤツクシヒゲヒラタコメツキ, 御岳山産; A, 体長7.5 mm (雌); B, 同上, 前頭横隆線(↑印); C, 同上, 左触角の第2, 3節(↑印).

村の御岳山麓(標高約1,800 m)の針葉樹林帯において, アミノ酸混入の酢酸バイトトラップを設置したところ, 本種が誘引された. これは岐阜県からは最初の記録である.

図示した雌の体長は7.5 mm, 体は黒色で両側は平行状, 背面は膨隆し, 真鍮色の鈍い金属光沢を有する. 触角は黒褐色で肢は暗褐色. 頭部の前頭横隆線の前縁中央部は抑圧されて幅狭く消失する (Fig. 1B↑). 触角は短く, 第2節は短小で円筒形状, 第3節は棍棒状で第2節とほぼ等長, 第4節から鋸歯状を呈し, 第4節は第2, 3節を合わせたものとはほぼ等長である (Fig. 1C↑). 前胸背板の後角の背面は扁平状で, そこには隆起腺を欠くが, わずかに現れることもある.

調査標本: 1♀, 岐阜県大野郡朝日村御岳山麓(標高約1,800 m), 8-VII-2001, 豊島健太郎採集. (図示した個体).

分布: 本州(長野県, 山梨県, 岐阜県).

引用文献

- KISHII, T. 1966. Some new forms of Elateridae in Japan (IV). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (10): 1-11, 2 pls.
- , 1989. Elaterid-beetles from Mt. Houwau-zan and Gozaishi-kosen Spa in Yamanashi Prefecture, collected by Mr. Koichi Hosoda in 1987 and 1988 (Coleoptera: Elateridae). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (33): 1-19, 3 pls.
- 岸井 尚, 1989. 南アルプス鳳凰山のコメツキムシ. 月刊むし, (219): 39-40.
- 大平仁夫・保田信紀, 2001. 層雲峡とその周辺のコメツキムシ(11). 層雲峡ビジターセンター研究報告, (21): 27-32.

(大平仁夫: 愛知県岡崎市舞木町;
豊島健太郎: 岐阜県岐阜市北一色町)

アシベアリヅカムシの日本国内及び琉球列島での記録

新井志保・野村周平・亀澤 洋

アシベアリヅカムシ *Prosthecarthron sauteri* RAFFRAY は台湾から記載され、NOMURA (1998) で本州・四国・九州の各地より採集された標本を基に日本国内から初めて記録された。その後も日本各地で得られている(野村・松尾, 2001; 岡山県, 2001; 新井, 2002; 河上, 2002; 河上, 2003; 河上, 2005)。

筆者らはこれまでの記録をまとめるとともに、記録のなかった静岡県及び琉球列島から得られた標本を保管しているので以下に報告する。

[既知産地] 千葉県君津市小櫃川河口, 広島県呉市仁方町, 香川県丸亀市土器川河口, 佐賀県江北町六角川河口, 同県鹿島市塩田川河口, 同県鹿島市北鹿島, 大分県佐伯市, 宮崎県延岡市大貫町(NOMURA, 1998), 長崎県平戸島紐差町(野村・松尾, 2001), 岡山県乙子吉井川河口付近(岡山県, 2001), 神奈川県川崎市多摩川河口(新井, 2002), 和歌山県有田市宮崎町有田川河口付近左岸(河上, 2002), 三重県橿田川河口(河上, 2003), 徳島県徳島市藍住町吉野川汽水域, 兵庫県揖保郡御津町苅谷保保川河口, 同県高砂市高砂町, 同県加古川市尾上町, 和歌山県御坊市塩屋町(河上, 2005)。

[追加産地] 2♂4♀, 静岡県榛原町勝間田川河口, 4. XI. 2000, 栗原隆採集; 3♂12♀, 兵庫県御津町揖保川, 13. VII. 2002, 森正人採集; 3♂13♀, 長崎県江迎町河口, 6. X. 2002, 西田光康採集; 5♂5♀, 奄美大島住用村役勝住用川河口, 25. II. 2004, 亀澤洋採集; [沖縄島] 89 exs., 大宜味村田港(図1), 12-13. X. 1988, 野村周平採集; 1♂, 真喜屋, 26. V. 2000, 盛口満採集; 2♂, 大浦川河口, 13. II. 2003, 佐藤正孝採集; [西表島] 2♂4♀, 古見, 10. VI. 1979, 笠原須磨生採集; 2♂, 星立付近(ライトトラップ), 18. V. 2001, 島田孝採集; 1♂, 大富(ライトトラップ), 24. V. 2003, 鶴智之採集; 1♂, 星立付近, 12. IX. 2003, 新井浩二採集。



図1. 工事によって破壊された沖縄島大宜味村田港の産地。



図2. 日本国内のアシベアリヅカムシの分布。

これらの記録をまとめた本種の分布は図2のようになる。分布図からもわかるように、本種は河川の河口付近より得られている。しかし本州から九州の採集地ではいずれも芦原で得られているが、今回検した琉球列島の標本は河口付近のマングローブ林より得られている。ライトトラップで得られたものも、やはりマングローブ林の近くであった。このことから、本種の生息場所には周辺の植生はそれほど関係なく、むしろ河川の河口という環境に依存したものと思われる。

また、図1のように、河川河口部は工事によって破壊されることが多い。今後本種の生息環境は減少することが考えられ、採集はますます困難になると予想される。

末筆ながら標本を頂いた故笠原須磨生氏、名古屋市の佐藤正孝博士、那覇市の盛口満氏、(株)環境科学の森正人氏、埼玉県嵐山町の野村周平氏、愛媛大学大学院の栗原隆氏、隠岐自然館の島田孝氏、北海道大学昆虫体系学教室の鶴智之氏の各氏、ならびに岡山県の記録に関する情報を頂いた岡山県倉敷市の青野孝昭氏、倉敷自然史博物館の奥島雄一博士に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 新井志保, 2002. 多摩川河口で採集されたアシベアリヅカムシ. 神奈川虫報, (138): 64.
 河上康子, 2002. 三重県橿田川河口からのタイワンヒゲブトエンマアリヅカムシの記録. 甲虫ニュース, (140): 11.
 河上康子, 2003. 和歌山県有田川河口及び紀の川河口からのアリヅカムシ3種の記録. 甲虫ニュース, (141): 7.
 河上康子, 2005. 大阪湾近郊沿岸部におけるナギサハネカクシ属2種とアリヅカムシ亜科2種の採集記録. 甲虫ニュース, (150): 11-14.
 NOMURA, S., 1998. Records of a Brachyglutine species, *Barbiera parpatis* (LÖBL) (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae) from Japan, with notes on its habitat. *Elytra, Tokyo*, 26: 129-130.
 野村周平・松尾照男, 2001. 平戸島, 生月島と西彼杵半島のアリヅカムシ. こがねむし, 長崎昆虫研究会, (66): 1-6.
 岡山県, 2001. 平成11年度河川水辺の国勢調査年鑑河川版一鳥類調査, 両生類・爬虫類・哺乳類調査, 陸上昆虫等調査編. CD-ROM.

(新井: 埼玉県嵐山町, 野村: 国立科学博物館, 亀澤: 西東京市)

○与那国島の歩行虫類 (追捕)

筆者は甲虫ニュース 148 号にて与那国島から記録された歩行虫類を整理し目録として報じたが、その後学会員各位のご協力により、琉球産昆虫目録で引用されていたかと思われる文献の存在や訂正すべき内容が明らかとなった。これらの内容を整理すると次のとおりとなる。

〈目録の内容訂正〉

ヒメヨツボシゴミムシの学名は *Microcosmodes flavopilosus* (LAFERTE-SENECTERE, 1851) としていたが、この属名は誤りであり、*Microschemus flavopilosus* (LAFERTE-SENECTERE, 1851) が正しい。保育社の甲虫図鑑、九大の昆虫目録共に同様の間違いをしており、これにならった琉球列島産昆虫目録でも同じことが見られる。

笠原が祖内より記録した *Peronomerus insularis* SCHONFELDT, 1890 オキナワケブカゴミムシ (筆者は目録で *Trichisia* 属として掲載) についてはその後、KASAHARA (1984) の琉球列島産ケブカゴミムシ 2 種を整理した論文でセダカケブカゴミムシ *Euschizomerus liebkei* JEDLICKA, 1932 のシノニミックリストに加えられている。つまり与那国島の目録から *Trichisia insularis* オキナワケブカゴミムシは抹消され、*E. liebkei* セダカケブカゴミムシの記録として目録へ新たに追加する。

アトキリゴミムシ亜科の解説部分で、今後記録される可能性のある種として *Amphimenes piceolus* カワツブアトキリゴミムシを例に挙げているが、これは *Amphimenes ryukyensis* リュウキュウカワツブアトキリゴミムシの誤りである。なお森田氏によれば、台湾から *Amphimenes asahinai* という種が記録されており、こちらも与那国島に分布する可能性があるため、*Amphimenes* 属の種が発見されれば、どちらに属するのか興味深いとのことである。

〈与那国島産歩行虫類目録への追加種〉

Panagaieinae ヨツボシゴミムシ亜科
 • *Euschizomerus liebkei* JEDLICKA, 1932

セダカケブカゴミムシ
 詳細は前述の目録内容修正を参照のこと。

Lebiinae アトキリゴミムシ亜科

• *Coptodera esakii* (NAKANE, 1956)

エサキキノゴミムシ

久部良岳より藤本 (1997) が記録している。

• *Parena latecincta* (BATES, 1873)

アオヘリアトキリゴミムシ

藤本 (1997) が祖内のライトトラップにより得られた個体を記録している。

〈目録に引用されていない記録〉

Bembidiinae ミズギワゴミムシ亜科

• *Bembidion semiluitum nakanoshimensis* (S. UENO, 1955)

ハマベミズギワゴミムシカラ亜種

高崎 (1994) は基亜種として記録しているが、これは筆者が目録で上記学名により記録したものと

同じものである。また同報文中で *Paratachys pallescens* ウスイロコミズギワゴミムシが日本未記録種として報告されているが、日本各地に生息が知られておりこの扱いは間違いである。与那国島からこれまで *P. pallescens* として記録されたものは、その扱いを前回の目録に示してある。

Pterostichinae ナガゴミムシ亜科

• *Abacetus submetallicus* (NIETNER, 1858)

ミナミツヤナガゴミムシ

高崎 (1994) により記録されている。

Callistinae アオゴミムシ亜科

• *Chlaenius virgulifer* (CHAUDOIR, 1876)

アトワアオゴミムシ

久部良岳より藤本 (1997) が記録している。

• *C. micans* (FABRICIUS, 1792)

オオアトボシアオゴミムシ

豊田 (2003) の記録以前に、加藤 (1995) が島内各所より記録している。

Pentagonicinae ツブゴミムシ亜科

• *Pentagonica biangulata* (DUPUIS, 1912)

ヒゲクロツブゴミムシ

祖内より藤本 (1997) が記録している。

Ctenodactylinae ヒラナガゴミムシ亜科

• *Hexagonia cyclops* (MATSUMURA, 1910)

ヒトツメヒラナガゴミムシ

久部良と宇良部岳からそれぞれ、加藤 (1995) が記録している。

Lebiinae アトキリゴミムシ亜科

• *Dolichoctis striatus formosanus* (HABU, 1967)

コヨツボシアトキリゴミムシ台湾亜種

久部良岳とインビ岳から藤本 (1997) が基亜種として記録している。学名については分布の点からみると台湾亜種とするのが妥当であろう。

結果として与那国島産歩行虫類目録への追加種は 3 種、削除される種が 1 種ということになる。

記録を整理するにあたり、国立科学博物館の上野俊一博士と東京都品川区の森田誠司氏には誤りの御指摘も含め適切なアドバイスをいただいた。また文献については東京都町田市の柴田泰利氏と香川県丸亀市の藤本博文氏にご教示いただいた。この場を借りて御礼申し上げる次第である。

引用文献

藤本博文, 1997. 1996 年春の八重山諸島採集記録。

VITAE, (38): 48-63.

加藤俊明, 1995. 与那国島採集記. *VITAE*, (36): 101-121.

KASAHARA, S. 1984. Two panagaieine carabid beetles from the Ryukyu islands, southwest Japan (Carabidae). *Elytra, Tokyo*, 12: 1-7.

高崎鉄也, 1994. 与那国島の誘蛾灯から採集したゴミムシ類. 神奈川虫報, (108): 34-36.

(埼玉県嵐山町, 新井浩二)

コルリクビボソハムシ (ハムシ科, クビボソハムシ亜科)
石川・福井・千葉3県に産す

鈴木 邦 雄

First record of *Lema (Lema) michioi* K. SUZUKI, 2005
(Chrysomelidae, Criocerinae) from Fukui, Ishikawa
and Chiba Prefectures, Honshu, Japan

Kunio SUZUKI

コルリクビボソハムシ *Lema (Lema) michioi* K. SUZUKI, 2005 (ハムシ科, クビナガハムシ亜科) は、最近、筆者が富山・愛知・兵庫・岡山・島根の5県から採集された多数の標本に基づいて記載した小形種で、水田や休耕地、湿地などに生育するイボクサを寄主とする。筆者は、既知の地理的分布状況から、本種は本州の中部地方以西に広く生息しているものと推測していた。筆者は、2005年7月、石川・福井・千葉3県下でもそれぞれ本種の生息を確認したので報告する。筆者は、既知の地理的分布状況から、本種が石川・福井両県下に生息していることは確かだと推測していたが、太平洋側の分布域が愛知県以東どこまで及んでいるかに興味を抱いていた。

調査標本：福井県—7♂♂2♀♀, 福井市間山町, 14-VII-2005; 10♂♂7♀♀, 坂井郡丸岡町兼兼, 14-VII-2005; 石川県—3♂♂4♀♀, 加賀市熊坂町, 14-VII-2005; 19♂♂2♀♀, 松任市福留町, 14-VII-2005; 千葉県—8♂♂5♀♀, 千葉市若葉区北谷津, 31-VII-2005. 採集者はいずれも筆者。

なお、本種には脚がほぼ全体黄色の黄脚型 *f. hiranoi* K. SUZUKI, 2005 が存在するが、その出現頻度は個体群によって異なり、富山県下では10ヶ所で採集された約400個体のうち、黄脚型は3ヶ所で得られた計10個体のみであった (SUZUKI, 2005)。今回、石川・福井・千葉3県下の5ヶ所から計67個体を採集したが、黄脚型はいずれの産地からもまったく得られなかった。

本種は、富山県下では年2化で、5月に越冬成虫が活動を開始し、6~7月に1化の、8~9月に2化の成虫が出現し、成虫の野外での活動は10月下旬頃まで見られる。今後、特に西南日本各地における本種の生息分布と同一個体群中の黄脚型の出現頻度の調査が望まれる。富山県下では、記載後も各地で本種の生息を確認し、黄脚型も新たに数ヶ所で採集している。

富山県下における本種の生息環境では、ほとんどの場所でイボクサ上にトゲアシクビボソハムシ *L. (L.) coronata* BALY, 1873 と共存していることが観察されているが、今回報告する石川・福井・千葉3県下の生息地においても同様であった。さらに、これら2種が生息しているような環境下ではほとんど常にツユクサが見られ、カワリクビボソハムシ *L. (L.) diversa* BALY, 1873 が普遍的に生息しているのが観察される。福井・石川・千葉3県下では、本種の採集地5ヶ所のうち3ヶ所で、カワリクビボソハムシに混じてセアカクビボソハムシ *L. (L.) scutellaris* (KRAATZ, 1879) も採集された。セアカクビボソハムシは、富山県下ではこれまでのところまったく発見されていない。また、富山県下では、本種の生息地の周辺にはスゲクビボソハムシ *L. (L.) dilecta* BALY, 1873 も普遍的に見られるが、今回、上記3県下の5ヶ所ではいずれも採集できなかった。

千葉県下からも採集されたことで、本種の現時点における地理的分布域は、北東限が太平洋側は千葉県、日本海側は富山県、南西限が瀬戸内側は岡山県、日本海側は島根県の計8県下に及んでいることが判った。今後、東北地方や四国・九州などでも本種の生息分布が確認されることを期待したい。

引用文献

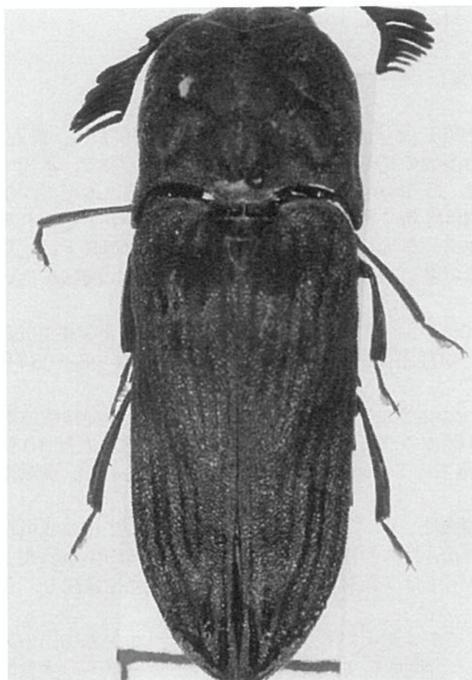
SUZUKI, K., 2005. Description of a new species of the genus *Lema* (Coleoptera, Chrysomelidae, Criocerinae) from Honshu, Japan. *Elytra, Tokyo*, 33: 86-94.

(930-8555 富山市五福 富山大学理学部生物学教室)

○クロビロウドコメツキダマシ屋久島の記録

クロビロウドコメツキダマシ *Pterotarsus borealis* HISAMATSU は珍しい種であり、記録報告も見当たらないようであるが、筆者は本種を材より羽化脱出(樹種不明)した標本を所持しているので報告する。

多数、鹿児島県熊毛郡屋久町栗生, 12. V. ~ 29. VI. 2003, 向山敬延採集。



全ての標本の触角が強く櫛状であったので不思議に思い、本種の大型個体(12.5 mm)と小型個体(9.5 mm)を岸井尚氏にお送りしたところ、生殖器抽出により大型個体が♀、小型個体が♂であり、*Pterotarsus* 属は雌雄共に触角が強く櫛状になるため、外見では雌雄の区別はできないとのことであった。

親切なご教示をいただいた岸井尚氏、標本を提供して下さった向山敬延氏にお礼申し上げる。

引用文献

黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III). 500 pp. 保育社, 大阪.

(兵庫県西宮市, 田中 稔)

○伊豆諸島八丈島におけるナガヒゲトコメツキの記録

ヒゲトコメツキの仲間は、篩いやFITを用いると容易に採集することができるが、伊豆諸島においては、これまでに記録がないようである。筆者らは八丈島のシノキ林に設置したFITにより、ナガヒゲトコメツキ *Aulonothroscus longulus* (WEISE, 1879) を得ることができたので、ここに報告しておく。

4 exs., 東京都八丈島三原山麓, 22-24. VII. 2005, 小林邦彦・鈴木互採集(鈴木保管)。

(東京都多摩市, 小林邦彦;
東京都世田谷区, 鈴木 互)

学会の発行物、バックナンバーの販売はすべて昆虫文献六本脚に委託しています。

在庫状況、価格などは直接お問い合わせ下さい。

昆虫文献 六本脚

営業時間: 13:00~19:30

定休日: 日・月・祝・毎月第1木曜日

〒130-0026 東京都墨田区両国3-4-9

ケイ・コーポラス 501

TEL/FAX: 03-5625-6484

E-mail: roppon-ashi@kawamo.co.jp

URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>

※仕入等で外出することがありますので、ご来店の際にはお電話を頂ければ幸いです。

甲虫ニュース 第151号

発行日 2005年9月20日

次号は2005年12月中旬発行予定

発行者 高桑正敏

編集者 鈴木 互(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館昆虫第2研究室 電話 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 7,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jsc2/index.html>

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社